



# 第3回学期末レポート 2007年度夏学期

---

日付：2007年6月16日

作成者： Gallaudet University Master of Social Work  
精神保健福祉士 M.S.W. 高山 亨太

## 第3回学期末レポート

### サマースクール

サマースクールは、Master of Social Workで必修として履修が求められている基礎科目のオージオロジー(Audiology)を受講した。春学期にオージオロジーを履修したはずなのに、なぜもう一度履修しているのかというと春学期に履修したオージオロジーはわかりやすくいうと入門編であり、今回のオージオロジーは応用編といったように、特に対人専門職向けとなっている。今回のクラスは、社会福祉の大学院生だけではなく、ろう教育、臨床心理学、カウンセリングやオージオロジーの現役大学院生、秋からの入学予定者などの様々な面々が参加していた。すなわち、Gallaudet University大学院の対人援助専門職課程は、すべてオージオロジーを履修することが義務づけられているのである。オージオロジーは、日本語で「聴覚障害学」、「聴能学」などと訳することが出来、聴覚障害や聴覚機能に関するリハビリテーションなどを科学的に追求する学問であり、実践でもある。具体的には、聞こえなどの聴覚に関すること、聴覚の仕組みを学ぶ聴覚生理学、音の発生や流れのしくみなどの音響学、さらに聴覚障害に関すること、補聴器や人工内耳などのテクノロジーを活用した支援機器について、さらにコミュニケーション支援方法やリハビリテーションの方法論などを学んだ。本来は、秋学期や春学期でも開講されているクラスであったが、秋学期の開講を待たずにサマースクールにて先に履修した理由は、オージオロジーのクラスは、生物学的、数理的などの理系の要素があり、また多くの大学院生にとってやっかいなクラスであると有名であることから文系出身の私にとっては大変なクラスでもあり、大学院の指導教員の強いアドバイ



↑ 改装が終わりつつある同窓会館

スもあり、秋学期の負担を減らすためにも先に履修することになったという事情があった。なお、このオージオロジーのクラスの目的は、ろう・難聴児・者に関わる専門家として最低限必要なオージオロジーの知識について学び、さらにオージオロジストとどのように連携し、協働するのかといったことを学ぶことが大きな目的である。

### 第3回学期末レポート



↑ チャイナタウンにある何かの建物

サマースクールは、全3クールで構成されており、オージオロジーは、第1クールで開講されていた。第1クールは5月14日から6月8日までが開講期間であり、オージオロジーは、5月17日から、18、21、22、23、29、30日と6月4～8日の全12回の日程で開講された。担当の教員は、聴力検査や補聴器調整などを行うオージオロジスト(Audiologist、聴覚専門士)で

はなく、発音訓練、読話訓練、コミュニケーション訓練、電話トレーニングなどのオーラルリハビリテーション(Aural Rehabilitation)を主に担当するスピーチパトロジスト(Speech Pathologist)を長年経験してきたという。教員自身も難聴であり、オージオロジストとともに長年働いてきた経験を元に、どのようにオージオロジーと関わるのか、どのような知識が必要なのかについて講義を進めていたため、大変わかりやすく収穫の多いクラスであった。しかしながら、英語のレポートを書くことなど大変なことは多かったが、もっとも大変だったのは医学専門用語を調べ、理解することの方がはるかに大変な作業だった。しかも短期集中での学習だったため、他のアメリカ人の学生に比べて、予習などをする暇もなく、復習と宿題、は票の準備で忙しく、講義についていくのがいっぱい、いっぱい状況であった。医学専門用語の辞書を本気で買おうと考えた一時でもあった。

短期間での集中講義のため、レポートや中間試験などの準備が大変であったが、日本で習った聴覚障害に関する知識を頼りに何とかついていくことができた。結果的に聴覚障害の基礎、聴覚障害に関する疾病、音響学、オージオグラムの分析方法、人工内耳や聴覚口話などのリハビリテーションに関する内容を学ぶことができた。改めて、ろう・難聴者やその親に関わる対人専門家として、やはり聴覚書害に関する基礎を学ぶ必要性を痛感させられた。今後のろう・難聴者に関わる専門職の養成やカリキュラムを考慮するにあたって、オージオロジーは重要であろう。これからも興味を持って、オージオロジーを深く学んでみたい。